

絵本を活用した道德教育の試み

—絵本『死んでくれた』を通して—

An attempt on moral education by using a picture book

—Through “Shinde Kureta (They dead for me.)”—

松田 智子

Tomoko Matsuda

要旨 (Abstract)

学校園では道德教育の生命尊重の項目の目標達成のために、絵本を教材として活用する機会もあるが、死をテーマとした絵本はほとんど取り上げられることはない。これは日本の無宗教な教育背景や、子どもに死は無縁であるという教育観によるところが大きい。本来、生と死は、表裏一体であり、子どもの日常生活の中に死が見えなくなっている現代社会だからこそ、死を見つめた生命尊重の教育が必要である。死を考えることは、つまり生を考えることであり、道德の生命尊重の教育の目標達成に結び付く。本稿は、谷川俊太郎の絵本「死んでくれた」を教材として、子どもへの読み聞かせによる保育と低学年に授業を行った実践報告の分析である。実践中の子どもの反応や授業後の振り返りや感想から、道德の生命尊重の教材として、「死」を扱った絵本の効果は高いと考えられる。

【キーワード】 絵本、死、道德生命尊重

I. はじめに

幼稚園や小学校を対象とした、「死」をテーマとした絵本を通しての「いのちの教育」を、道德教育及び死の準備教育という視点から幼稚園及び小学校低学年の実践を提案する。

現在の学校教育では、幼稚園児や小学生を対象とする生命尊重の教育は、生きることの喜びを実感する「生命賛歌」をテーマの中心とするものが多い。本来「死」と「生」は表裏一体であるが、無宗教である現代の日本の教育界は、道德教育の生命尊重項目において特に「死」を意図的に避けてきた経緯があると筆者は考える。その理由の1つは、未来ある子どもには、命のプラス面である明るい未来をイメージさせるべきで、暗いテーマの死をあえて取り上げて教える必要はないという考えにある。もう一つは人生経験がまだ浅い子どもにとり、大人でも受容しがたい死を理解するのは不可能だという、大人の一方的な思い込みである。そして最後に、仮にそれら2つのことが解決してとしても、指導する教師側の死生観が確立していなければ、適切な「死」を扱う教育はできないという主張があるからである。筆者は、今日では自宅死がほとんどなくなり、隔離された病院死が多くなり、子どもの周囲から意図的に「死」が遠ざけられている現代社会だからこそ、学校や幼稚園で「死」を通して「生」を教えるという生命尊重の道德教育は必要だと考える。

「死」というテーマは、最近は絵本の多様化により、文部科学省の検定教科書にも教材として取り上げられるようになった。例えば、小学校1年生の国語教材「ずーっとずっとだいすきだよ」(ハンス・ウィルヘルム 絵と文 久山太市訳)、小学校3年生の国語教材「わすれないおくりもの」(スーザン・バークレイ 絵と文 小川仁央約)等、子どもにとっての親愛なる2人称の「死」については、教科書に教材として掲載されるようになった。しかし教科書のこれらの教材は、詞は絵本と同じでも、絵本という作品とは全く別物であると認識し、指導する際は留意するべきである。なぜなら、国語の教科書は紙面の都合上、または文字での表記を重視するため、絵本の重要な要素である絵が大幅にカットされており、主に読み物教材として位置づけられているからである。本来、絵本とは詞と絵が一体とな

って、相互作用を及ぼしながら、読み手の心に迫るという構造を持つ芸術作品であるが、その重要な片方が抜け落ちているからである。

Ⅱ. 絵本とは何か

1. 絵本の定義

最近、医療の発達や栄養状態の改善により人間の寿命が延びて、死を予告してから死亡するまでの時間が長くなり、長期にわたり死と向き合うことが多くなってきた。そのため、読書療法の一環として絵本も取り上げられ、絵本は子どものためだけでなく、大人も対象とするようになってきた。その結果として絵本の多様化が進み、「死」のテーマを含んだ様々な絵本が世に送り出されるようになった。

従来、絵本とは「絵を主体とした子供向けの本」と捉えられていた。しかし、現在の絵本学の共通の定義は「絵本は、絵（視覚表現）と詞（言語表現）という、異なる2つの要素が互いに調和結合した、本（書籍）という形態を持つ表現メディア」となっている。この定義は絵本の画面に空間性や時間性があることが認められ、絵本が物語や思想を表現し伝達するための手段として評価されるようになった近年になって、語られるようになった新しい概念である。1976年にパーバラ・ベーダーが著書「American Picturebooks」で示した絵本の基本概念は画期的であったので、それを紹介しつつ絵本とは何かを考えることとする。

絵本とは、テキストであり、イラストレーションであり、トータル・デザインである。大量生産の1品目であり、一つの商品である。社会や文化や歴史のドキュメントである。そして、まずなによりも。こどもにとって一つの体験をもたらすものである。芸術形式としては、絵と言葉が互いに補完し合っていること、向かい合った2つのページが同時に提示されること、そしてページをめくることによってドラマが生み出されることが絵本の構造を決定づけている。絵本はそれ自体、可能性は無限である。

絵本の絵と詞は、絵本を説明するための文章や文を飾るための挿入絵ではないのである。言語と視覚の表現が融合し、2つの表現方法が相乗的に作用しあって、絵本という独立した表現世界が生まれているのである。つまり絵本は独自の表現形式と構成要素を持つ芸術なのである。絵本芸術は、「視覚表現と言語表現が互いに補完する」「向かい合う2つのページが同時に提示される」「頁をめくることによりドラマが生み出される」という3要素が構造を決定している。さらに絵本は、社会・文化・歴史の記録である。絵本に登場する風景や街並み、そこで営まれる人々の生活など、絵本自体が貴重な歴史の記録書でもあるといえる。

上記の絵本の構造的3要素から考えると、教科書に掲載された「死」をテーマにした先述の2つの物語は、絵本芸術とは全く異なった、児童文学に近いものになっていると筆者は考える。絵本の詞には文学では考えられない「非自立性」がある。絵本の絵と詞は、それぞれの存在が補完することを前提として創造されているため、単独では表現としては不完全なものとなってしまうことが多い。しかしここでいうところの不完全とは、双方のもたれ合いを意味するものではない。本日紹介する絵本『死んでくれた』は、谷川俊太郎の詩に後から塚本やすしが絵を付けたものであるが、塚本の絵は、谷川の詩の意図を明確に示す役割を果たしていると筆者は考える。

2. 絵本『死んでくれた』について

本稿では、絵本『死んでくれた』を通し、生きることと表裏一体である3人称と1人称の「死」を直接的に考えさせることとする。『死んでくれた』を幼稚園年長児と小学校1年生に読み聞かせ、この絵本が「いのちの教育」に与える影響を実践的に探ることを目的とする。

(1) 作品について

この絵本は谷川俊太郎の詩に、後から塚本やすしが絵をつけた作品だが、詩と絵がしっかりと補完しあっている。谷川の研ぎ澄まされた簡単明瞭な言葉、塚本の読み手の感情に沿った場面が変わるたびに現れる、異なった表現方法、鮮やかで力強い色使いが子どもにとり非日常的であり、子どもの心に強く印象に残るだろうと思われる。さらにクロースアップされたすべての登場人物が、3人称の「死」を1人称の「生」と関連付けることにおいて、視覚的な大きな効果をあげている。

まず、表紙左寄りに、大きなハンバーグがとドーンと配置され、赤・黄・緑の色鮮やかな野菜が並ぶ。その横にひ

らがなで「しんでくれた」と黒々としたタイトル。あまりにも直接的な表現にドキッとするが、表裏の見返しには、命の源である輝く太陽の黄色があふれんばかりに描かれている。中表紙は全面赤色、そこに白抜きで「しんでくれた」の文字がくっきりと、鮮明な赤と白と黒の効果的な色彩対比が、息詰まるような空間を生んでいる。絵本前半は赤色が多用されている。しかし、その輪郭に使われている黄土色が、色彩効果をやさしくして立体感をうみ出している。

谷川の詩は、命の連鎖を残酷になりすぎず、食べ物への感謝を強制しすぎることなく、淡々と明快な言葉で表現されている。人間は他の生物の死によって生き続けることができるという、忘れられがちな事実、子ども達のはっと気づくことができる絵本である。食料として死にゆく牛・豚・鶏・魚達は、見開き画面いっぱいに描かれており、圧倒的な存在感でまっすぐ読み手＝捕食者を見つめ迫ってくる。絵本前半のここまでは、赤が多用されテーブルクロスまでも赤であり、死＝血をイメージさせる構成となっている。

頁をめくりつつ進むと、現れる世界が突然に変わる。人間の食料となり死んだ動物たちが地中にぽっと立ち尽くす見開き頁は、色調も一転して暗く深く変化する。今までの力強い躍動感や生命感が消え、暗闇に沈むように立ち尽くす動物に子どもの心がぐっと重くなる。ここで、子どもは今まで元気に動き回っていた動物が、人間の食料になったことを実感するだろう。

さらに頁を進めると、突然に僕たち人間の日常の生活場面に引き戻される。絵本の中心は3人称の死から1人称の私の死へと展開を迎えつつ、生物としての人間の「生」と「死」を行き来する。人間である僕は地面に直立し、人間としての1人称の「死」を断固否定するとともに、人間が食物連鎖の頂点に立っていることを平然と宣言する。3人称である多くの動物の死は容認するが、僕という人間の1人称の死は拒否するという姿勢、つまり人間の傲慢さを無表情に語る姿に対し、筆者が驚きと怒りさえ感じる場面である。

その後、人間である僕が何故「死」を拒否するか、その理由が述べられていく。人は多くの人に支えられ愛され生きている社会的な存在であること、人間だけが社会的な関係の中で生きる動物であること、人間だけが死に対し悲嘆にくれる動物であることが示される。僕が死んだ際の、僕の周囲の身近な親しい人々の悲しみが淡い色とりどりの涙で表現されていく。仲間の死を悼み悲しみ埋葬する習慣を、太古の昔から持ってきた人類の歴史を思い起こすならば、十分に納得もできる根拠である。

筆者は、まぶしく白い見開き頁の右下で、朝日を受け両手を伸ばし、ベッドから起き上がろうとする僕の姿に、なぜかほっとする。死んでくれた動物のいのちのぶんも生きようとする人間であり、今日も生きるために朝を迎えるのである。最後に未来をまっすぐ見すえ、ランドセルを背負った僕の姿にも生きることへの希望を感じる。



図 1. 表紙と裏表紙の見開き



図 2. 扉



図 3. 第1場面



図 4. 第2場面



図 5. 第3場面

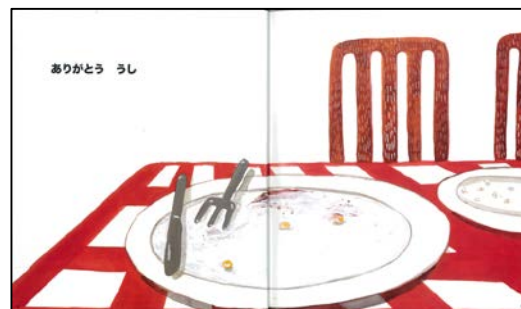


図 6. 第4場面



図 7. 第5場面



図 8. 第6場面



図 9. 第7場面



図 10. 第8場面

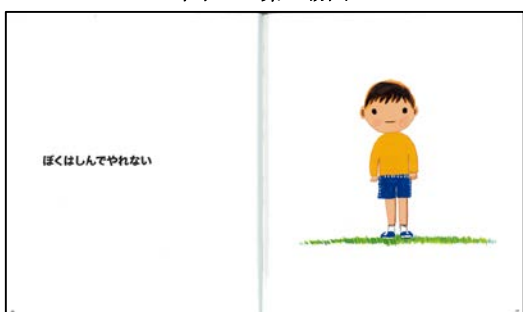


図 12. 第9場面



図 11. 第10場面



図 13. 第11場面



図 14. 第12場面



図 15. 第13場面

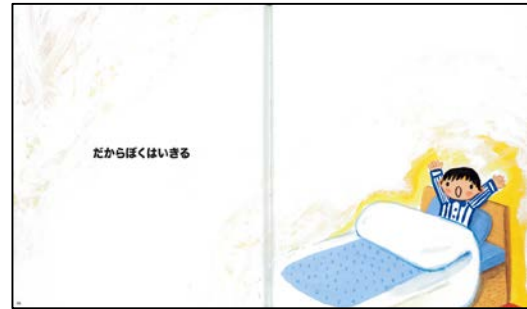


図 16. 第14場面



図 17. 第15場面



図 18. 最終ページ

(2) 「死」を扱う絵本について

幼い子どもを対象とする絵本で「死」を扱うことは、宗教的になると困る、楽しく食事できなくなると困る等の理由で賛否両論がある。しかし、筆者は改めて問いたい。何故宗教的になると困るのか、宗教とは人類の思想にとり重要な一要素ではないか、何故それ自体を否定するのか。そして楽しい食事とはどのような食事の情景を指しているのかと尋ねたい。

最近の子どもは、核家族化が進み親しい肉親の死に遭遇する機会も減少し、死を実感できない状況に置かれている。そのため、道徳の生命尊重の項目の教育において、筆者は「死」を切り離して「生」を指導することは一面的で歓迎できないと考える。人は生きている限り食べ続け、食べることは他の生物が死ぬ、つまり1人称の「生」は多くの3人称の「死」で支えられているということを、現代社会ではあまりにも自覚できる機会が減っていると考えるからである。さらに、子どもは目の前のスーパーで販売されているきれいな薄切り肉や切り身の魚と、先ほどまで動き回っていた魚や牛や豚や鶏の具体的な姿とを、結び付けて捉えられていないと思うからである。

Ⅲ. 幼稚園及び小学校での実践と分析

1 幼稚園年長児対象の保育実践（5月）

教師の発言と様子	幼児の発言と様子
T: (絵本の表と裏の表紙を見せる)	C: いつもの本と、なんかちゃうやんか
	C: 何が死んでくれた?
T: 何のはなしかな?	C: ハンバーグ (他児も口々に言う)
T: (絵本の見返しと中表紙を提示後)	
しんでくれた (ゆっくりと読む)	C: えっ! 食べたということや
T: うし しんでくれた ぼくのために	C: えっ? それどうゆう意味?
T: そいではんばーぐになった ありがとううし	C: そうゆうことか、牛肉や
T: ほんととはね ぶたもしんでくれている	C: 豚肉や
T: にわとりも それから	C: にわとりも (本を見つめながら)
T: いわしやさんまやさけやあさりや いっぱい	

<p>しんでくれている</p> <p>T: (動物が沈む、暗い見開き場면을提示)</p> <p>(この場面はつぶやきを出すため間を置く)</p> <p>T: ぼくはしんでやれない</p> <p>T: だれもぼくをたべないから</p> <p>T: それに もししんだら おかあさんがなく おとうさんがなく</p> <p>T: おばあちゃんも いもうとも (間を置く)</p> <p>T: だからぼくはいきる</p> <p>T: うしのぶんぶたのぶん しんでくれたいきも ののぶん</p> <p>T: ぜんぶ</p> <p>T: どうでしたか</p> <p>T: (動物が暗闇に沈む頁を提示) ここは暗いね</p> <p>T: (僕が裸で地面に直立する頁を見せて) どうして 誰も僕を食べないの</p> <p>T: (最後の背後に光を受ける僕の頁を見せて) 最後の「ぜんぶ」に続く言葉は何ですか</p>	<p>C: なんかいいる (じっと目を凝らして見る)</p> <p>C: 骨がこわそう、火が燃えている (指さす)</p> <p>(場面が急に人間に変わり、えっと驚いた表情)</p> <p>C: わあ (笑いが起こる) 裸や、さむっ!</p> <p>C: だって人はお肉じゃないから</p> <p>C (淡い色の流れる多様な線を見つめ、急に静かになる)</p> <p>C: これ涙かな (本をじっと見る)</p> <p>C: 何が全部なん?</p> <p>C: もう終わった、はやっ!</p> <p>C: おもしろかった、めっちゃおもしろかった</p> <p>C: 人の裸のところ恥ずかしかった</p> <p>C: 動物を、土の中に埋めているから見えにくいの (口々) 火が燃えてるよ</p> <p>C: わかんない、皆眠っているのじゃない</p> <p>C: 食べられないように隠れてるのかも</p> <p>C: 食べないよ、僕たちは食べ物じゃないから</p> <p>C: ライオンや恐竜なら食べるかも</p> <p>C: 全部、食べたから</p> <p>C: 全部、食べるから</p> <p>C: 全部、人間の栄養になるから</p> <p>C: 先生、僕のおばあちゃんも死んだんだよ</p> <p>C: お父さん、震災で死んだ人を見たって</p> <p>C: 死んだともだちに会ったんだって</p>
---	---

絵本を読む前に、年長組の担任と話した際「死を扱う本は読んだことがない」「食教育なら安心して扱えるが、死を扱うのは戸惑う、保護者が子どもから聞いてどう思うかが心配だ」等の声が聞かれた。教師が、幼稚園児に与える絵本としては、「成長」「楽しさ」「美しさ」「感謝」「生命賛歌」「友情」「おもしろい」などプラス志向の価値のものを選択していることに改めて気づかされた。

今回は、絵本を一旦全部読み聞かせた後で、場面が転換するポイント頁を振り返り、教師から子どもに問いを投げかけるという手順で実践をすることにした。絵本の受け止め方は、それぞれの子どものに任せるべきであると主張する立場からすると、今回の読み聞かせ方法は課題があるかもしれないが、筆者は絵本を優れた芸術作品であるとともに、教材という視点でとらえている。そのため、今回はあえてこのような読み聞かせのスタイルを依頼した。

読み聞かせを参観した筆者は、幼児の真剣なまなざしやつぶやきから、自らの生活を他の動物の「死」と結びつけることにより新たな気付きをしていることを、驚きの声や表情が何度も表出することから確認した。また、毎日1冊の絵本を園で読み聞かせてもらい、さらに絵本を毎週借りるなど、絵本を園の経営の重点に置く幼稚園でさえも、子どもは「死」に関わる絵本にほとんど触れていないことを知った。なぜなら、絵本を選択し読むのは子ども自身だが、その絵本を選択する枠組みは大人の価値観で決定されているからである。教師や保護者から与えられる以外に、子どもが自らの価値観で本を選ぶ機会はほとんどないからである。このように考えると、死がテーマとなる本を選択し読

み聞かせすることは、教育者であるとともに、一人の人間としての、教師自らの死生観が問われることだと考える。

2. 小学校1年生対象の授業実践（5月）

国語の詩の授業と道徳の合科学習の教材として絵本「死んでくれた」を扱った。授業中の子どもの反応、授業後の児童の振り返りと指導者の感想を紹介する。

（1）授業の目標と主要な発問等

この教材は1時間扱いとして、目標を2つ設定した。1つは、生き物を食べて生きる、自分たちの生活に気づくことである。2つ目は、生き物の「死」に支えられた自分の「生」を自覚し、前向きに生きようとするものである。授業の最初の読み聞かせは、まず場面が転換する箇所は、児童の反応を見ながら意識的に間を大きく開けるようにした。その際に、児童が色や配置、登場人物の表情、表現方法にも目が行くように、ゆっくりと頁をめくりながら進めることに配慮した。次に、児童のどのようなつぶやきも受容しつつ、とりわけ多くの児童がつぶやいた場面について、後で振り返り発問をすることにした。

1番目の場面展開の最後である、人間の食料となった動物が暗闇に沈む見開き頁を見せて、「暗闇に何が見えますか」と発問した。児童からは、死んだ動物の影がある、死の世界に行つたみたい、土に埋めても動物は生きているみたいという反応があった。次の場面展開の最初の見開き頁（僕が大地に一人立つ姿）を見せて、「どうして僕は死んでやれないのですか」と発問した。児童は、人間は食べものじゃないから、死んだら家族のみんなが悲しいから（一部に動物だって悲しむの意見あり）、豚や牛には家族はいないから、子どもは大人にならないといけないから、人間は友達だから食べてはいけないから、人間は食べてもおいしくないからなどの意見があった。ここでは児童が、自分の死（1人称の死）と3人称の死を、自分にとり全く別のものとして認識していること、人間の命は他の動物と命の重みが違うと捉えている考え方が見て取れた。

上記の考え方を認めて、次の頁（僕が裸で大地に立つ）の見開きを見せながら、「人間も動物の仲間ではないですか」と補助発問を行った。児童からは、人間は食べるための動物じゃない、食べたなら家族がどこにいったかと探すなど、人間が社会的な関係の中に存在する動物である視点が少し出てきた。

最後の頁のランドセルを背負う僕、わずかな微笑みが、前向きに生きる態度の象徴である。さらに、僕の背景、白から段階的に濃くなるオレンジの光が、それを後押ししているようである。この頁を見せて、「ぜんぶ・・・」とは、なにが全部なのですか、僕の顔や周囲の様子を見て考えを述べるように発問した。児童からは、人は生き物から栄養をもらっている、動物の命をもらった、ランドセルで背負って学校へ行くこと、家族の気持ちや願いも背負っている、たくさんの動物の命も背負っている等の発言があった。

本授業の最後に「あなたが授業を通して学んだり、感じたりしたことを振り返りシートに自由に書いて下さい」という作業をさせた。

（2）教材に出立った児童の様子

児童は『死んでくれた』をいう題名に、衝撃を受けたようである。怖かったのだろうか、読む前にあちこちで「死んでくれた、なんだって!」「怖いよ!」とつぶやきやが聞こえた。体言止めの力強い言葉と、赤と白と黒のコントラストが、一部の児童に恐怖感を抱かせているのか、頁をめくるたびに聞き手の驚きの声と静寂が繰り返され、児童の心の揺れが伝わってきた。1頁ごとに絵本が怖くなっていき、もう二度と見たくないという児童も数人いた。

（3）授業後の振り返りシート

振り返りシートには、悲しくて怖い絵本だったとの感想が目立った。絵本との出会いで、日常的に忘れていた「他の動物の命を食べて、自分たちが生きている」ことを思い出してしまったからだろう。児童の多くは、そのことを悲しい現実であると認めつつも、とても怖いことだと感じている。

主な振り返りシートの内容を紹介する。小学校における、残さず感謝して食べようという給食指導のためか、「朝、昼、夜のご飯を残さず食べないと」「ありがとうの気持ちで給食を食べる」と食物への感謝の言葉もいくつか出てくる。しかし多くは「動物の命を大切に、だから自分の命も大切に」「命をもらったから、頑張つて生きる、死んではいけない」「命をつなげるために生きる」「命をもらったから、ちょっとだけでも長生きしないと」「生き物は他の生き物を食べて生きるから、いのち=いのち」というように、動物の命のおかげで生存できる自らの命の大切さを述べる内容だった。

（4）担任（授業者）の振り返り

担任教員は、児童の振り返りシートを読み「この絵本を敏感にとらえた感性が豊かな子どもほど、振り返りシートに自分の本当の思いが書けていない、それほど衝撃が大きかったのかもしれない。」「割り切りが早くて、これはこれと考えることが得意な子どもほど、前向きな意見を書いている」と述べた。突然にイベント的に「死」を扱う教材を取り上げたことが、児童の戸惑いになっている可能性があるとも述べた。

担任の発言から、筆者は、「死」を身近なものとして捉えることができるような年間計画を作成し、道徳の生命尊重の態度や感情を、生活の一部としなければいけないと考える。「死」に関わる絵本を、単に道徳の1項目として取り上げるだけでは、子どもの自死やいじめを防ぐのは不十分だと思う。余談ではあるが、授業当日の給食に魚が出たそうだが、「これも命かと思うと食べにくい」という児童もいたそうである。

IV. 「死」の絵本が道徳「生命尊重」に果たす役割

筆者は絵本の研究者でもなければ、絵本作家でもない。絵本を優れた教材として認め、学校教育に活用すること、特に「死」をテーマとする絵本が道徳教育の生命尊重に果たす役割について、実践的に研究する教育者の立場で意見を述べている。絵本はテキスト（言語表現）とイラストレーション（視覚表現）という異なる2つの要素が互いに調和結合した本（書籍）という形態を持つ表現メディアであるということは、いまや共通の認識である。さらに松居（1973）は「絵本、子どもにとって楽しいものです。絵本は教科書ではありません。問題集でもありません」と述べている。筆者は、この意見に基本的には賛成だが、絵本のもつ教育的な力を、もっと有効に活用するべきだとも考える。

絵本『死んでくれた』は、教育的な意図のもとに作られたものでなく、子どもが見て読んで楽しむために刊行されたものである。塚本は谷川の詩を視覚的に表現する際に谷川に寄り添い、塚本自身の世界を描き出している。絵本の絵が、読み手に的確に伝えるべき内容を具現化するのが目的ならば、塚本の絵は成功であると筆者は考える。大げさな表現であるが、この絵がなければ、読み手に伝わる絵本の内容そのものが、変わっていただろう。

筆者が、谷川の詩「死んでくれた」を詞だけで授業をするならば、子どものイメージを膨らませるため、多様な補助発問を準備し児童の発言を増やす努力をしなければならない。また、視覚的な補助教材として、肉の処理現場の写真や本を用意するだろう。さらに、扱っているテーマが「死」という抽象的な概念であるため、「死」一般に論議が拡散しないように、論議の枠を設けた発問を準備する。つまり、詞だけで生命尊重を伝えるのはとても困難になると予想される。つまり塚本の絵の語りがなければ、最後の場面の児童振り返りは「死んでくれた」という題名に引きずられ食育が目標になる。その結果「食物は生き物の命だから、大切にしなければいけない」「食べ物を残すことは、命を粗末にすることだ」などの感想が主流として出てくるだろう。つまりこの絵本のテーマは「死と生」ではなく「食物への感謝」の傾向が強くなると思われる。絵本『死んでくれた』は、谷川の詩とともに、塚本の絵が語っているからこそ、生命尊重の目標達成に有効な作品になり得るのである。

このように述べると、そもそも絵本の捉え方が誤っていると、絵本学者から批判を受けるかもしれない。けれども、先述した「ずっとずっと大好きだよ」「わすれられないおくりもの」などの絵本が、国語教材として教科書に掲載されると同時に、絵が大幅に略されると、全く別物のように感じるのは事実である。幼い子ども対象の道徳教育は、視覚的な効果の果たす役割が大きく、絵と詞が補完し合った絵本教材をそのまま使用することが、重要であると筆者は考える。

ここまで、絵本が道徳の生命尊重に果たす役割を、詞と絵の補完機能という視点で述べてきた。しかしこれらは、筆者の授業経験からの試論に過ぎない。今後さらに多くの実践的な研究を期待するものである。

【参考文献】

- ・谷川俊太郎（詩）塚本やすし（絵）『しんでくれた』 2014 校成出版社
*絵本の掲載は、関係者から承諾を得ている
- ・藤本朝巳『絵本のしくみを考える』2007 日本エディタースクール出版部
- ・生田美秋、石井光恵、藤本朝巳編著『絵本入門』 2013 ミネルバヴァ書房